

茶の湯 文化学会 会報

第104号 / 2020年3月30日
発行 茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
http://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/

文献の調べ方と使い方 「茶の湯文献目録」作成に関わる者の視点から

八尾嘉男

茶の湯文化学会の会誌『茶の湯文化学』に収録されている「茶の湯文献目録」は、みなさまのようにお感じでしょう。『茶の湯文化学』は年度（四月～翌年三月）中に二回、九月と三月に刊行され、「茶の湯文献目録」は三月刊行の号に二年前の一月～十二月分が掲載されています。今年、二〇二〇年三月末の号は、二〇一八年一月～十二月分です。

「茶の湯文献目録」は、私も含めて学会の幹事数名でデータ作成を行なっています。わざわざ文章化する話なのかという疑問や、会報の巻頭文にはそぐわないのではという感もありますが、本稿では「茶の湯文献目録」に際し、どのようにデータを集めているか、「茶の湯文献目録」をよりよくするための課題点をお話していこうと思います。

学会員のなかで現在在学中の学生の方や学生生活を終えてさほど年月を経ていない方は、各大学によつて差異はあるでしょうが、初年次教育のなかでレポートや論文の書き方を主眼とした文章表現とともに文献の調べ方を教わります。学芸員や教育機関の教職員、所属はななくとも研究者の途を歩んでおられる方は業務や論文執筆のなかで身につけている話です。ただ、茶の湯文化学会は、ほかの学会のように研究者や、これから研究者の途を歩もうとする方ばかりが会員というわけではありません。会員構成の間口が広いことが大きな特徴です。これは懐深い良さである反面、生意気口になります。学雑誌に論文を投稿いただいた際に質の差が大きくなるという課題があります。文章表現は別に委ねるとしまして、その質の差を解消する一助というのが狙いです。また、大会の総会などで口頭で行き交ったことがある用語を文章化するという一面もあります。

文献を調べているプロセスと

目録検索データの注意点

文献を調べる際に「茶の湯文献目録」作成者がまず用いるのは、国立情報学研究所(NII)がデータ公開している「Ciniini」です。「Ciniini」は、参加している大学や博物館などの図書館が所蔵登録とともに共有目録データを提供し、公開しているものです。本(「大学図書館の本をさがす」、「Ciniini Books」と逐次刊行物(雑誌)収録の論文(「日本の論文をさがす」、「Ciniini Articles」)について検索できます。

文献を調べる際に「茶の湯文献目録」作成者がまず用いるのは、国立情報学研究所(NII)がデータ公開している「Ciniini」です。「Ciniini」は、参加している大学や博物館が所蔵登録とともに共有目録データを提供し、公開しているものです。本(「大学図書館の本をさがす」、「Ciniini Books」と逐次刊行物(雑誌)収録の論文(「日本の論文をさがす」、「Ciniini Articles」)について検索できます。

須とされる内容ではありませんので、これまたヒットしないことがあります。それ以外に自らの気にとめていた記憶以外で補完して検索しているのは、国立国会図書館の所蔵目録(NDL OPAC)です。ここからは「茶の湯文献目録」から離れますが、国立国会図書館は、著作権が消滅している文献はデジタル公開されているものがあります。その公開範囲は自宅などからパソコンで見れるもの、大学図書館や一部の大きな公共図書館の館内限定で見れるものがあります。後者は自身が利用可能な図書館に出かけて、カウンターに申請して見れるものです。近年の大きな変化として触れておきます。

もう少し目録作成から離れた話をします。歴史学は、研究成果が日進月歩する理系の研究分野と異なり、昔のものは先行研究として意味を有さないと必ずしも限りません。ただ、ある程度より以前の雑誌論文は、目録検索データではヒットしないことがあります。ですので、昔の雑誌論文は、各図書館で所蔵している『雑誌記事索引』でカバーするのが良いです。話を「茶の湯文献目録」に戻します。目録作成に際して、私は岩田書院のホームページでPDFファイルで公開されている「地方史情報」も参照しています。こちらは、地域史の逐次刊行物(雑誌)や地方の博物館、自治体発行のものも補完ができます。ほかに洋書(日本以外で出版されたもの)は、大学などが契約をしていて、利用者資格のある方が検索できる目録検索エンジンがありますが、ここでは所属がなくても検索できるものに話を止めて詳細は省略をします。

「茶の湯文献目録」について

「茶の湯文献目録」は、これまでに述べた検索結果や各個人で現物を確認した結果をもとに作成されています。「茶の湯文献目録」は

二年前の一月～十二月分が掲載されますが、なかにはもっと早く知りたいという方がいらっしやると思います。ただ、目録検索エンジンに目録データが反映されるのは、各機関で所蔵に際しての受け入れ、目録作成などが成されるまでの一定の時間がどうしても必要です。速報性を優先すればするほど、漏れが多くなりますので、二年前の一月～十二月分がという形にしています。

また、「茶の湯文献目録」は「図書」(刊行月、編著者名の五十音順)、「図書のなかに収録されている文献」(刊行月、編著者名の五十音順)に続いて、「逐次刊行物(雑誌)収録の文献」(書名順、論文

著者名の五十音順)を茶道の各流儀の流儀誌と流儀誌以外に分けて収録しています。流儀誌と流儀誌以外で分けているのは、逐次刊行物(雑誌)の分量は多くなりますので、少しでも見つけやすく、煩雑にならないようにするためです。

「逐次刊行物(雑誌)収録の文献」は同一著者による連載のものが多く含まれますが、各回のタイトルを必ずしもすべて挙げておくわけではないことを一つ留意してください。つまり、連載のなかから特定の茶人や茶道具、事象に関わるものをピンポイントで探せないケースもあるということです。

省略してまとめているのは、各連載の各月タイトルを毎月刊行であれば十二回分それぞれすべて挙げると、その分、紙数が増えて煩雑になるからです。

ですので、連載の文献は、必要

に応じて自身で「茶の湯文献目録」を目安に目録検索エンジンで個別に検索をかけていただいたり、「逐次刊行物(雑誌)」によっては、十二月号や節目の号で総目次が掲載されていますので、そちらを参照してください。

最後に、茶の湯文化学会は茶文化にまつわる歴史、文学、茶の生産、茶の品質・効能など多様な視点をもつ会員で構成されています。そのため、流儀誌と流儀誌以外で分けたとしても、まだ「流儀誌以外の逐次刊行物(雑誌)」は一つのカテゴリーあたりの分量が多く、煩雑な印象は否めません。「流儀誌以外の逐次刊行物(雑誌)」のなかで例えば二つか三つに分ける基準があれば、より見やすくなるのではないかと。毎回、「茶の湯文献目録」を作っていて感じる点です。より使いやすい「茶の湯文献目録」につながりますので、分類でご意見があれば仰っていただければと思います。

理事会

令和元年度第三回理事会が、二月十六日(日)午後一時より同志社大学 光塩館 地下会議室において行われた。理事十七名が出席し、以下の議題について討議がなされた。

- 一、各担当理事より令和元年度事業報告・令和二年度事業(案)について
 - 二、令和二年度海外研修について
 - 三、会誌・会報について
 - 四、会長候補者選考委員会からの諮問
 - 五、令和二年度総会・大会について
 - 六、その他
- 第一議題では、各担当理事より令和元年度各地例会について、それぞれ報告が行われた。引き続き令和二年度事業(案)が出された。第二議題では、令和二年度海外

研修について、中村（修）会長代行より、今年度のシンポジウムのテーマが「岡倉天心と明治の茶の湯」ということもあり、アメリカ・ボストンに四泊六日か三泊五日の日程で、九月に開催予定であることが報告された。

第三議題では、会誌について山田委員長より、三十三号の進捗状況などの報告がなされ、また、論文の投稿を幹事等に促すようお願いがあった。

会報について飯島理事より、三つ折りしやすいように紙質を薄くすること。会員減少に伴い発行部数を減らすことが提案され、承認された。

第四議題では、田中秀隆理事より、会長候補者選考委員会（田中理事、原田理事、船阪理事）で話し合った結果、現在、会長代行をしていたらだいてる中村修也会長代行が、そのまま会長を引き受けていただくのが良いのではないかということ推薦され、また、谷

端昭夫理事の理事辞任の申し出が受理された。令和二年度総会にて決定することが決まった。

第五議題では令和二年度総会・大会について東京国立博物館の茶室五カ所の見学、ならびに大会シンポジウムのテーマ「岡倉天心と明治の茶の湯」に関する発表者が決定された。また、研究発表四人を決定した。

例会

東京例会

（令和元年十二月十四日）

「日本にあつた陸羽像を中心に」

岩間眞知子

江戸時代に日本で描かれた「陸羽像」から、日本人の陸羽『茶経』観を探った。その前提として、江戸時代までの日本人、中でも茶人たちが、どのように陸羽『茶経』を観ていたかを検討した。

日本では鎌倉時代の栄西『喫茶養生記』に『茶経』の引用があり、その後、陸羽の名や『茶経』の語は、五山文学の詩文、『夢中間答集』、『明窓宗珠菴主像』、浄土宗文献などに見える。だが内容まで紹介するのは、『庖厨備用和名本草』や『古今養生録』という薬書、養生書である。

茶書でも『和漢茶誌』、『茶教字実方鑑』に『茶経』の引用があるが、無秩序な引用で趣旨が判らない。次に『茶道古典全集』全十二巻に陸羽『茶経』を探すと、蘭叔玄秀『酒茶論』を含め六本の書籍に見出した。茶人たちは、中国の茶は健康増進、暇つぶしの役に立つものの、禅味礼讓を重視する茶会のある日本の茶の湯には及ばないと言ふ。

江戸後期になると、煎茶文化が広まり、『茶経』の和刻本や注釈書も刊行され、「陸羽像」（一七九七）も翠中軒知新によって版行された。「陸羽像」の作者・翠中軒

知新は、茶の湯に造詣が深く、漢籍の知識も豊富な人で、喫茶の普及に功績のあつた陸羽を、利休同様に崇敬すべきと考え像を描いたと賛に述べる。

そのほか江戸末期までに春木南溟筆「陸羽像」があり、また『新撰煎茶一覽』、『煎茶要覽』に陸羽像が見られる。いずれも鶴氅衣を着て、明代の中国画を基に描いたと思われるが、原本は未詳である。中国では、唐代に陶磁器製の陸羽像が作られたことは確認できるが、歴代人物像を多数掲載する図書で、陸羽像を含むものは1点であった。今後さらに日中の陸羽像、また日本での陸羽『茶経』の受容の様子を探求したい。

東海例会

（令和元年十一月三十日）

「茶器と青銅器―茶の湯と煎茶における青銅器」

田畑 潤

茶の湯と煎茶における青銅器に

ついて、どちらも「古銅」の表記が用いられるが、その内実は大きく異なっている。「古銅」は字の通り古い銅器を指す。古くは殷周青銅器にはじまり、春秋戦国・秦漢青銅器と変遷し、宋代以降に倣古銅器のブームが起り、明清時代にも多くの倣古銅器が作られていることから、どの時代の銅器であるかが重要である。

茶の湯の「胡銅（古銅）」は、中世以降の中国禅僧や貿易により舶載された青銅器を指す。仏具として香・花・燈の三供養に用いる三具足として日本にもたらされ、茶の湯にみられる「胡銅」の器としては、花入が主である。一方、煎茶の「古銅」は、中国古代の青銅器またはそれを写したもので、主に幕末から明治、大正時代に美術商により舶載されたものを指す。火炉・香炉・花瓶など転用として用いられる他、様々な器種が展観席に並べられる。

両者の美意識にも大きな違いが

ある。茶の湯の「胡銅」は『君台観左右帳記』に、無文の物が上等であるとの記載があり、中国宋代以降に作られた新出の倣古銅器が主で、伝世品の多くがシンプルな造形・文様である。一方、煎茶の「古銅」は、中国文人への憧憬から、中国宋代以降の倣古銅器の他、はるか古代の殷周青銅器を含んでおり、その造形は複雑で、饗養文など器面全面に施文する青銅器が主である。

例会のご案内

東京例会

二〇二〇年六月二十七日（土）

午後二時

会場：五島美術館

『古今茶湯集』の史的検討

依田 徹

「千宗旦の道具にまつわる考察―

道具の選別と享受の実態―（仮）

荒井欧太郎

二〇二〇年九月十九日（土）

午後二時

会場：根津美術館

「福喜多靖之助著『CHAN'NYU TEA CULT OF JAPAN』―海外

へ伝えられた近代数寄者の茶の湯―

櫻庭美咲

「文禄期における豊臣秀吉の茶の湯について―葉茶壺の利用を中心

に―

上田真紀

二〇二〇年十月二十四日（土）

午後二時

会場：東京国立博物館平成館小講堂

「女性が茶道を学ぶ意味―一九八〇年代以降の雑誌研究を中心

に―

太田ありか

「高橋箒庵について（仮）

齋藤康彦

二〇二〇年十二月十二日（土）

午後二時

会場：東京国立博物館黒田記念館

小講堂

「古田織部と連歌―近衛信尹との両吟百韻を中心に―（仮）

工藤隆彰

「竹川竹斎『川船の記』（射和文庫蔵）―空想茶会記を含む桜田事変

関連資料が隠されていた茶書（全八冊）について―

岩田澄子

二〇二一年二月二十七日（土）

午後二時

会場：根津美術館

「宗湛日記の茶会における「盆」の使用（仮）

作山裕美香

「『南方録』におけるわび茶人の系譜―茶聖としての利休―（仮）

櫻本香織

東海例会

午後二時～三時半

(開場午後一時半)

会場：昭和美術館

二〇二〇年四月二十五日(土)

「平安古筆さまざま(仮)」

四辻秀紀

二〇二〇年七月四日(土)

「茶碗(仮)」

伊藤嘉章

二〇二〇年九月十二日(土)

「染付について(仮)」

善田のぶ代

二〇二〇年十一月一日(日)

「尾張の焼物(part.ii)(仮)」

前田 博

近畿例会

開催日は未定(決まり次第HPにも掲載させていただきます)

午後二時(開場：午後一時半)

会場：大阪市立東洋陶磁美術館

地下講堂

「茶の湯と竹工芸」

巖田季子

「煎茶と竹工芸」

宮川智美

*当日は、特別展「竹工芸名品展」

ニューヨークのアビー・コレク

ションーメトロポリタン美術館

所蔵」開催中です。

*近畿例会のみの出席者は入館料

不要ですが、特別展の観覧には、

別途観覧券の購入が必要です。

協力：大阪市立東洋陶磁美術館

北陸例会

開催日は未定(決まり次第HPにも掲載させていただきます)

午後二時

会場：鯖江市文化の館

「堀口捨己の中柱論」

近藤康子

二〇二〇年九月二十六日(土)

「未定」

二〇二二年三月二十日(土)

「未定」

金沢例会

二〇二〇年五月十日(日)

午後一時半

会場：ITビジネスプラザ武蔵五

階研修室一

「茶の湯と漆芸」

福島 修

二〇二〇年六月二十一日(日)

午前九時

会場：金沢湯涌温泉江戸村 旧山

川家住宅

金沢江戸村茶会 二〇二〇水無月

茶会

二〇二〇年七月五日(日)

午後一時半

会場：ITビジネスプラザ武蔵五

階研修室一

「山上宗二記」の諸本」

竹内順一

二〇二〇年八月二十三日(日)

午前八時半

移動例会

高山茶の湯の森見学・料亭「洲さ

き」

二〇二〇年九月二十一日(月・祝)

時間未定

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

高知例会

二〇二〇年六月二十一日(日)

午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶

室

「茶の湯文化学会二〇二〇年度大

会の研究発表をテーマとしたシン

ポジウム」

発表者 未定

軽食茶事 正午～午後四時

席主 三名

会費 千円(参会希望者は予め連

絡をして下さい)

二〇二〇年九月二十七日(日)
午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室

岡倉天心『茶の本』第六章輪読(各自お持ちの本をご持参ください)

二〇二〇年十一月二十九日(日)

午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室

岡倉天心『茶の本』第7章輪読

茶事 正午～午後四時

席主 四名

会費 五千円(参会希望者は予め連絡をして下さい)

二〇二一年二月七日(日)

午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室

茶書『未定』を読む

茶席 正午～午後四時

茶の湯文化学会の研究成果を实践する。茶の湯を一般の方々に親し

んでもらうため「床飾り」「道具立て」はするが、お点前はお客次第として楽しめる茶席を設ける。
会費 三百円

お知らせ

令和二年度

総会・大会のご案内

令和二年度総会・大会を左記の日程で計画中です。詳細は令和二年四月に郵送にてご案内いたします。

日程：令和二年五月三十日(土)

見学会(東京国立博物館

茶室)

懇親会(ホテルパークサ

イド上野「芙蓉」)

五月三十一日(日)

総会・大会(文科大学

越谷キャンパス)

質問コーナー

質問1

茶事と呼ばれる茶会では、「懐石」という食事が出ます。一般的な食事や宴会とは異なる「懐石」は、禅宗の用語なのででしょうか、またいつから「懐石」というようになったのでしょうか？

はじめに、禅語には「懐石」という言葉はありません。似た禅語には「温石おんせき」があります。これは禅林の修行僧は午後から食事を取らないので、修行中のひもじさや寒さに耐える為に石を温めて懐中したことに由来します。

現代では「懐石」というと、「一汁三菜」を基調にしつつ、煮物椀や強肴が付随する茶会の食事を意味します。しかし茶の湯の規式が整っていく十六世紀になっても、

客へのもてなしは一人の客前に複数の膳がならぶ豪華な本膳料理でした。

その中で利休をはじめとするわび茶人は、ただ一つの膳を用いた「一汁三菜」というシンプルな食事の形式を生み出します。しかし当時はこうした茶会の食事も、「仕立」、「振舞」、「飯」、「料理」、または「膳」と呼ばれていました。「山上宗二記」は茶会の食事を意識的に「会席」と呼んでいるので、桃山時代の末には、ごく一部で「会席」を使用したとは考えられます。

江戸時代になると、元禄三年(一六九〇)頃成立の『南方録』に初めて「懐石」表記が見られますが、全巻を通じて三ヶ所のみで徹底したものではありません。またその後の各流派の茶書や茶会記も前時代と同様の表記で、「懐石」の使用はほとんど見られません。しかし十八世紀中ごろから、ごく一部の大名茶人が「懐石」表記を用いています。その中でも幕末の大老

井伊直弼は、約二〇〇回におよぶ茶会のほぼ全会で「懷石」を使用しています。

茶会の食事に「懷石」を用いることが一般的になるのは、さらに先のことです。茶の湯の歴史の中で「懷石」の使用はまだ新しいことと言えるでしょう。

質問2

先日茶席がいくつも設けられた大きな茶会に伺った折、ある薄茶席で「煙草盆」^{たばこぼん}がある正客の前に出ました。調べてみれば、「煙草盆」も茶の湯の道具の一つのようです。日本人は昔から喫煙の習慣があることから、流派によっては「煙草」を茶席に出すのでしょうか？

正式な茶会（茶事）では、客は濃茶と薄茶の両方を頂戴します。

一碗の茶を分け合って頂く濃茶

は、その日の会の眼目です。そして濃茶が終わり、緊張が解かれたなごやかな雰囲気の中で供されるのが、薄茶ということになります。そうした会の薄茶席では「さあ、少しリラククスして下さい」という意味で、流派を問わず、客に座布団や煙草盆が出されます。

質問者が出席された茶会は、客が色々なお席を回る茶会ですね。薄茶席で煙草盆が出たことは、正式な会に準じた用意であって、不思議なことではありません。盆には「火入れ」「灰吹」^{はいふき}、「煙管」^{きせる}が入っています。そして茶席の煙草盆には、煙管に詰める煙草の葉も用意されています。原則として、客は懷紙と扇子だけを持って席入りしますから、私物の煙草や煙管は茶席に持ち込めないからです。煙管の灰を落とす「灰吹」は竹ですが、煙草盆を含めてその他の道具は、亭主の好みで選びます。それを拝見するのも、客の楽しみの一つです。ただし、現代では禁煙の場所

も多くなり、また喫煙者も少数になってきて、茶席の亭主によっては煙草盆を省く場合もあるようです。

もう一つ、「歴史好き」と質問にありますので、ちょっと付け加えさせて頂きます。

タバコは南米大陸を原産とし、先住民の間で儀式や日常の嗜好品として用いられていました。南米大陸にヨーロッパ人が進出するまで、ヨーロッパでもアジアでもそして日本でも、タバコの内容はまったく知られていませんでした。日本では一五〇〇年代後半に、ヨーロッパ人との交易が盛んになります。しかし日本で喫煙の流行が始まるのは、慶長年間（一五九六〜一六一五）も半ば過ぎでした。一五〇〇年代の茶会には（例えば利休の茶会にも）、煙草は一度も出てきません。

一六〇〇年代も半ば近くなると、茶会の気楽な場面で流行の煙草を出すことは、客を寛がせるも

でなしのの一つになったのでしようね。千宗旦（一五七八〜一六五八）や片桐石州（一六〇五〜七三）には、複数の好み「煙草盆」が伝わります。

